

こんやくしゃ  
わたしの婚約者は  
がくえん おうじ  
学園の王子さま!

くり  
久里いちご・作

やまぶきいろ  
山吹色・絵



アルファポリスきずな文庫

# もくじ

プロlogue	6
学園の王子さまとわたしのひみつ	11
わたしと王子さまの出会い	17
危ない！	25
キュン死にしちゃう！	33
婚約の理由	37
たつた一人の特別な男の子	43
危ない！	54
罰が当たつたんだよ	62
新たな出会い	69
みんなでカラオケへー！	78
聞き間違いじゃないよね？	89
猛アプローチ！	97
真中くんVS奏多	106
本当の波乱	115
嫌な予感、大的中～～～！	123
恋に落ちた音	134
やめちゃえばいいのに	145
転校の理由	156
お似合い	165
しまった！	172
正々堂々	180
雲間から太陽	188
勇気を出して	196
そばについて	206
大好き	215
ラスト	221
その23	222
その22	223
その21	224
その20	225
その19	226
その18	227
その17	228
その16	229
その15	230
その14	231
その13	232



# 登場人物紹介



**月城姫乃** 中1

ある日転校してきた、人気雑誌『smile』で活躍中のJCモデル。なぜか奏多のことが気に入ったようで……!?



**真中太陽** 中1

体育祭実行委員会で出会った明るくてチャラい男の子。とあるできごとがきっかけで莉子に興味を持つ。



**永野由美** 中1

莉子のクラスメイト。熱狂的な奏多のファンで、1年生ながら連奏多親衛隊に所属している。流行に敏感。



**結城さん** 中1

莉子のクラスメイト。足が速くて、体験入部期間中にもかかわらず陸上部期待の星とウワサされている。



**椿 玲奈** 中3

さざなみかなたしんえいたい連奏多親衛隊の隊長をつとめる気の強い美人。奏多にアタックする月城さんのことをよく思っていない。



**漣 奏多** 中1

学園の王子さま。女子に興味がないクール男子だけど、婚約者の莉子のことを溺愛している。本当は婚約のことを言いふらしたいのに、莉子に止められているのがフマン。絵を描くのが好き。



**野崎莉子** 中1

運動が得意なフツーの女の子だけど、実は幼なじみの奏多の婚約者。婚約のことはみんなにナシショにしているのに、奏多がところかまわずアプローチてきてドキドキしている。

# プロローグ 学園の王子さまとわたしのひみつ

わたし、野崎莉子がこの春に入学した桜峰学園には、みんなの憧れの王子さまがいる。

「ぎやー！ やばいっ。漣くん、今日もかつこよすぎなんだけど！」

「今日も国宝級のイケメン！ はあ。ちよつとでいいから、お近づきになれないかなあ」

「いやー。無表情での破壊力だよ？ 笑顔を見てみたいなあ」

「笑顔を向けられた日には確実にキュン死にする！」

クラスの女の子たちが目をハートマークにして語っているのは、漣奏多のことだ。

話題の張本人である漣くんは、イヤフォンをつけて窓の外の葉桜に向いている。

そのきれいな顔から感情は読みとれない。

サラサラの黒い髪に、雪のように白い肌。

大きな目は、透きとおつていて宝石みたい。

たしかに彼は、少女マンガの中から抜けだしてきた王子さまのようだ。

女の子たちが騒ぐのもうなずける、完ぺきなイケメンぶり。

ぼんやりとしていたら、背後からツヤつぽ

いため息が聞こえてきた。

「はーーー、今日も今日とて漣くんが尊すぎ

る！」

永野由美ちゃんだ。

由美ちゃんとは、二週間前の入学式で仲よ

くなつた。

「あんなにかつこよくて、こんなにもてはやされてるのに、まつたく浮ついてないんだよー？」

「存在が、女子の夢そのもの！」 今日

も生きていてくれてありがとう漣くん！」

由美ちゃんは、かなり熱狂的な漣くんファ



ンである。

「なにせ、連奏多親衛隊に入っているくらいだ。」

「えつと……由美ちゃん、落ちつこう？」

「落ちついてられるかつてーの！ 莉子、あれ以上のイケメンは身近にそうそういうないよ！ あたしのイケメンレーダーに狂いはないっ！」

「あはは。そ、そなんだあ」

「うーん。おかしいなあ」

「えつ。なにが、おかしいの？」

「莉子つてさあ、漣くんのことになると、みょうに冷めてない？」

ギクリ。

「漣くんほどのイケメンを前にして、どーしてそんなにヘーゼンとしてられるの？」

みん

うつ！

「由美ちゃんにジト目で見つめられ、じわじわと追いつめられていく。」

うけど

わたししだつて、漣くんは完ぺきなイケメンだと思う。

あの顔のよさで成績優秀、おまけに運動神経までいいときた。

だけど、わたしにとつての漣くんは……ただそれだけの存在じゃない。

どうしよう。ボロが出そうだし、この話はもうつづけたくないなあ。

でもそんな願いが届くわけもなく、由美ちゃんはそのまま話をつづけた。

「うーん。もしかして、同じ小学校だったから、見慣れてるとか？」

「あつ……そうそう！ そういうことだよ！」

「えー、そういうものかなあ。あのレベルのイケメンになると、見慣れるのも難しいと思

うけど

さつきから、冷や汗があせたら止まらない。

由美ちゃんに、なんて返答をすればいいのかわからなくて。

うけど

野崎莉子。

どこにでもいる、ぐぐぐ普通の中学一年生。

運動が得意なぐらいで、他にこれといった特徴のないわたしには、すごいひみつがある。わたしは、学校の誰にも、このひみつを知られるわけにはいかないんだ。

## ＊＊＊ わたしと王子さまの出会い

おうじ

であ

その日の放課後は、体験入部に行くという由美ちゃんとわかれ、まっすぐ家へ帰った。  
今日は、彼と約束している日なのだ。

「おじやまします」

「奏多くん、いらっしゃーい！」

ママは、家にやつてきた彼を見るなり、満面の笑みを浮かべた。

「ふふふー。奏多くんつたら、さらに男前になつたわねえ。中学でもモテモテなんじやな

い？」

「あー……。声をかけられることは、増えたかもしないですね。わざわざしいことのほうが多いですけど

「そうなお？」

「はい。オレ、莉子以外の女子に興味ないので」

## 「ごほっこほつ」

か、奏多!? ママの前でなに恥ずかしいこと言つてくれてんの!

焦るわたしに、今度はママが追撃してきた。

「あらあらあら。奏多くんは、うちの莉子にはもつたいないほどいい子よねえ。莉子。

奏多くんに愛想をつかされちゃダメよ」

「えつ。莉子に愛想をつかすなんて、絶対にありえないんですけど……」

「はいはい、わかつたからもういいよ! ママつ。わたしたち、部屋に行つてるから!」

ママのニヤニヤ笑顔から逃げるよう、奏多の背中を押して階段を駆けあがる。

さつきからずつと顔が熱い。ゆだりそうだ。

二人でわたしの部屋まで移動して、大きく息をついた。

「奏多つ! ママの前で、あーいうこと言つてた気がするけど……」

「なんで? 事実を言つて、なにが悪いの」

「じ、事実つて……」

わたし以外の女子に興味はないとか、だいぶすごいこと言つてた気がするけど……

「じ、事実つて……」

「くちごもつたわたしを、奏多がじいと見つめてくる。

か、顔が近い! まつ毛まで見えてるよ。肌、きめこまかすぎなんだけど!

「オレは、莉子しか見てない」

「ま、また、そうやつて恥ずかしいこと言う!」

「だつて、ほんとのことだから」

するりと伸びてきた彼の手が、わたしの頭をふわりとなれる。その心地よさに思わず目をほそめたら、奏多は幸せそうに笑つた。

「かわいい。ねえ、抱きしめてもいい?」

「へつ! そ、それはダメっ!」

「こ、こここ、心の準備ができておりませんので!」

「なんで? 莉子はオレの婚約者なのに」

奏多は、小さな子供のようにいじけて、眉尻を下げた。

わたしが抱えている、とんでもないひみつ。

それは、わたしが桜峰学園の王子さまである漣奏多の婚約者だということだ。

なぜ、わたしみたいな**平凡女子**と、**奏多**のような**王子さま**が婚約者同士になつたのか。

その発端は、わたしと**奏多**のママにある。

二人は二十年来の大親友なんだ。

わたしが初めて**奏多**に出会つたのは、小学二年生のときだつた。

『りこ。かなたくんと、かなたママが遊びにきたわよ～』

ママに呼ばれて玄関に出ていくと、小柄な男の子が、自分のママのスカートのスソをつまんで、心細そうにわたしのことを見ていた。

『かなたくん。はじめまして！』

『……』

**奏多**の第一印象は**天使**！

いまはかつこよさとかわいさが同居しているけど、昔はかわいい系だつたんだよね。

『ほら。かなたも、りこちゃんにアイサツしなさい』

**奏多**ママにうながされて、**奏多**はおずおずと頭を下げた。

『は、はじめまして』

大きな瞳はうるんでいて、ママのスカートをつかむ小さな手は震えてた。

ガチガチに緊張している**奏多**を見つめながら、わたしは心の中で決意したんだ。

**この子を守ってあげなきゃ**、つて。

出会つて間もないころの**奏多**は、そのくらい大人しい子だつたの。

**奏多**ママは結婚してからもバリバリ働いていて、**奏多**はよくわたしの家にあづけられて

いたんだけど、すぐ無口だつた。

しゃべらない代わりに、よく絵を描いていたな。

色鉛筆セットとスケッチブックを持つてきて、一生懸命に手を動かしていた。

わたしは、そんな**奏多**を横目に、マンガを読んだり宿題をしたりしていた。

まったく話さない日がほとんどだつたけど、**奏多**は小動物みたいでかわいかつたから、目があつただけで満足していたんだと思う。

でも、じょじょにそれだけじや物足りなくなつて、もつと仲よくなりたいと思うように

なつた。

絵ばかり描いている**奏多**に、かまつてほしくなつたんだ。

『かなたくんは、いつも絵を描いてるね！』

『……ダメだった？』

おびえたように絵を描く手を止めた奏多に、慌てて弁解した。

『ううん！わたし、かなたくんが絵を描く時のさらさらって音、大好き！なんだか落ちつかから。ねえ、いまはなんの絵を描いているの？』

ぱちぱちと瞬きをしながら戸惑う彼はかわいらしくて、顔がほころんだ。

## その2 たつた一人の特別な男の子

出会つて間もないこの<sup>かなた</sup>奏多はとても大人しかつたけど、一緒に過ごす時間が長くなるうちに心を開いてくれるようになつた。

たくさんの思い出があるけど、忘れもしないのは奏多と出会つてから初めての冬だ。

きたる二月十四日の、バレンタインデー。

その日は、好きな人にお菓子をあげる日だとママから聞いて、奏多に手作りのお菓子をあげようと張りきつっていたんだ。

『りこく。クッキー作り、ママは本当に手伝わなくて平気なの？』

『だいいじょうぶだつて！何度か練習したし、今日は一人で作る！』

『そうー？じゃあ、ママはちょっと買い物に出るね』

『はーい！』

せつかだから、一人でがんばりたい。

から！  
かうよ  
の  
もう  
で  
じまん

かなた  
奏多に ひとり つく  
作つたんだ よつて 自慢したい

けど……  
調子に乗つて、ママの申し出を断つたんだ

『うわあ……』  
『や二郎、こいつただいま出で

できあがつたココアクリッキーに似た物体を  
かじつたとき、敷はげいこうかい後毎におそわれた。

『なにこれっ!? かつつつたー!』

おせんへいかと思はほどのかたき！

なんで！ママと作つたときはサクサク  
ていて、あんなにおいしかつたのに！

これはひどい。人の食べ物ですらないよ。

不器用なのに、調子に乗つて一人で作つたりしたからだ……  
だしつぽい  
大失敗したクッキーを前に、床にのめりこんじやいそうなほど落ちこんでいたら。

『……えっ。か、かなた!?』

『な、ななな、なんでいるのつ

『ママから、野崎さんにおつかいを頼まれたんだ。家の前で野崎さんに会って、中にいれ

『ええっ！ 気づかなかつたなあ』  
『話しかけようか迷つたんだけど、待つてたんだよ。りい、すゞぐく生懸命だったから』

うわあ～～～！ なんてバツドタイミング！

くう 晴 よ



わたしが内心ムンクの叫び状態になつていることにも気がつかず、奏多は、魔の力チコチクリッキーに興味を持つてしまつた。

『それ、りこが作ったんだよね?』

『たゞ、そ、そだけど』

『食べたいな』

『ダメ!』

『どうして? こんなに、たくさんあるのに』

『ぐーつ。ダメたらダメなの!!』

だつてそれ、人の食べ物じやないから!

そう素直に打ちあけてしまえば、奏多も引き下がつたのかもしれない。

でも、そこまで止直になるのは恥ずかしくて、意地をはつたんだ。

『そんなに必死に止められたら、逆に氣になるよ』

奏多は、わたしを無視して、ひよいつとクリッキーを食べてしまつた……

『あーつ!』

『ん……』

奏多に、魔のクリッキーを食べられてしまつた!

絶望的だ。

やさしい彼でも『こんなにまずいクリッキー、どうやつたら作れるの?』ってあきれるとちが違ひない。

わたしは、奏多に笑顔になつてほしくて作つたのに……：

『んん……』

なかなか飲みこめずにいる奏多を前に、どんどん消えたいような気持ちになつていく。

『ううううつ……。だから、食べないでつて言つたのに。あなたのバカうツー!』

悲しさと悔しさとで、みつともなく涙まで出てくる。

そんなわたしを見つめながら、奏多は激マズクリッキーをぐくりと飲みこんだ。

『えつと……勝手に食べてごめんね? でも、おいしかったよ。りこ、大げさすぎ!』

『はあ? ウソつかないでよ! どう考へてもまずいじゃん!』

『たしかに、かたかつたけど……味は、ちゃんとおいしかつた。なにより、りこが作った

クッキーだもん。おいしくないわけがないよ』

『だれが食べても、思わず吐きだしてしまいそうなほど、ひどいできだつたのに。  
奏多は、涙目になつたわたしを安心させるように、一枚二枚と手をのばして食べきつたんだ。

うれしさと申し訳なさと恥ずかしさがうずまいて、胸がいつぱいだつた。

『……ほ、ほんとは、もつとサクサクとしてる、おいしいのができる予定だつたの？』  
『うん。次に作つたら、また食べさせてね』

『……いいの？』

『当然でしょ。それより、どうして急に一人で作ろうと思つたの？』

『もうすぐバレンタインだから。かなたに受けとつてほしくて』

ぎゅっと服のはしをつかみながら答えると、奏多はなぜか顔を赤らめて、声を震わせた。

『えつと……。オレのため、だつたの……？』

『そうだよ。バレンタインは、好きな人にお菓子をあげる日だつて聞いたから』

『えつと……。オレのため、だつたの……？』

『そうだよ。バレンタインは、好きな人にお菓子をあげる日だつて聞いたから』

『えつと……。オレのため、だつたの……？』

『そうだよ。バレンタインは、好きな人にお菓子をあげる日だつて聞いたから』

『そつか……！　ふふつ。そつかあ』

奏多はおさえきれないというように、笑みをこぼした。

急に上機嫌になつてニコニコしながら、首をかしげた。

『残りもぜんぶもらつていい？』

『ウソでしょ！　そんなに食べたらお腹こわすよ！』

うれしい気持ち以上に、奏多の胃が心配になつてしまつ。

本気で止めたんだけど、聞く耳を持つてもらえなかつた。

『こわさないよ。それに、りこがオレのために作つてくれたクッキーを、他の誰かに食べられるほうが嫌だ』

まじめな顔で主張されて、胸がぎゅうっと締めつけられて痛いぐらいだつた。

なんでだろう。

ドキドキしすぎて、奏多の顔をまつすぐ見られない。

奏多は、守つてあげたい、かわいい男の子だつたはずなのに。

宣言どおり、わたしの失敗作をべろりと平らげて『また、作つてね』と笑われ、胸の高

鳴りが止まらなかつた。

あの日からずつと、奏多はわたしにとつて、たった一人の特別な男の子なんだ。

### ＊＊＊ 婚約の理由

奏多と出会つてから一年が経つて、わたしたちは小学二年生になつた。

『かなた！ ママから聞いたんだけど、うちの近所に引っこしてくるつてホント!?』

『うん。りこ、もう知つてたんだね』

『すぐーーくうれしいっ！ これからは、学校でもかなたに会えるんだね』

飛びあがつて喜ぶわたしに、奏多は顔を赤くしながら『うん。オレもうれしいよ』つて笑つてくれた。

わたしにとつての奏多は、そばにいるのが当たり前の、大切な幼なじみ。

でも……、奏多は背が伸びるにつれて、どんどんみんなの王子さまになつていつた。

『キャーー！ 漣くんのいまのシユートやばくないっ!?』

『かつこよすぎ～！』

球技大会に出れば大活躍で、その日一番のヒーロー。

『今回の小テストで満点をとったのは、漣くんです！』

『またかよ！』

『頭よすぎだろ』

『すごい！』

『漣くんに勉強教えてもらいたいなあ』

『テストはいつも満点。』

『日々かつこよく成長していく奏多に、学校中のみんなが憧れるようになつた。』

『莉子ちゃんつて、漣くんの幼なじみなんでしょ？』

『うん。そうだよ』

『いーな、いーなあ。あんなに完ぺきな幼なじみがいるなんて、うらやましいよ』

『そして、奏多の幼なじみであるわたしには、センボウの視線がつきまとつようになつた。奏多はずつとみんなの注目的だつた。』

『その調子のまま、小学五年生になつた彼は、とにかくモテまくつた。』

『うわ……また、きてる』

『下駄箱を開き、困つたように眉根を寄せせる彼の姿を、たびたび目ににするようになつた。』

ハートのシールで封がされた、パステルカラーの便せん。

ラブレターだと一目でわかつて、心にモヤモヤが広がつた。

かつこよくて、勉強も運動もできる奏多を、女の子が放つておくわけがなかつたんだ。のどからせりあがつてくる、苦いソバを必死に飲みこむ。

ほんとは、ラブレターなんて受けとらないでつて叫びたい。

でも、ただの幼なじみのわたしに、そんな権利はない。

『先週もきてたね。奏多、モテモテだ』

ヘンに思われないようく笑顔をつくろつたら、奏多はまじめな顔をして聞いてきた。

『ねえ、莉子。みんなにオレたちの関係のことを言つていい？』

『関係つて？ 幼なじみだつてことは、みんな知つてると思うけど』

『そっちじゃないよ』

『えつと……なんのこと？』

『本気でわからず、困つて首をかしげたら、奏多は焦れたように言つたんだ。だから、婚約したこと。オレら、結婚するでしょ？』

世界がひつくりかえったみたいな衝撃を受けた。

奏多から衝撃発言を聞いたその日は、光の速さで帰宅した。

『ねえっ！ わたしと奏多が結婚するつて、どういうこと!?』

『あれ？ そういえば、まだ莉子には言ってなかつたつけえ』

わたしは、ママと奏多ママとの間で交わされたという盟約を、そのとき初めて聞いたんだ。

ふたりは、高校時代からの大親友。  
大学からは、お互別々の道を歩んだけど、その間も定期的に連絡を取つていてずっと仲よしでしたんだって。

そこまでは、うなずける。

問題はここからだ。

一人は同時期に子供を授かり、やがて生まれてくるわたしたちへと想いをはせた。

『もしも、お互いの子供が同性だつたら、私たちみたいな親友になれるといいね』

『もしも、異性の子供が生まれて、気があいそなうなら結婚させよう！ そしたら私たち、家族になれるね』

うんう……んんんんん？

なにその空気よりも軽いノリ！ 全然、意味わからないんだけど！?

かくして生まれてきたのが、わたしと奏多だ。

わたしは女の子で、奏多は男の子。

つつこみどろまんさいながらも、わたしたちは生まれた瞬間から婚約者同士だつたのだ。

『それにしても、奏多くんつてあんなにイケメンなのにまつたく浮ついてないし、純粋でいい子よねえ。生まれながらにして、あんなにできた婚約者がいるなんて、莉子は幸せ者ね！ ママに感謝しなさい！』

なんということだ……！

とんでもない真実を知つてしまつたわたしは、ひたすら動搖していた。

翌日<sup>よくじつ</sup>の朝<sup>あさ</sup>、わたしは念のために、奏多<sup>かなた</sup>本人にも確認<sup>かくにん</sup>をとつた。

『か、奏多<sup>かなた</sup>。えつと、その……結婚<sup>けつこん</sup>のことだけど……奏多<sup>かなた</sup>は、いつから知つてたの？』

『え？ けつこう前<sup>まえ</sup>だけど。莉子<sup>りこ</sup>は知らなかつたの？』

『当然<sup>とうぜん</sup>のように受けいれていた彼<sup>かれ</sup>に、またもアゼンとした。

『だからさ、ラブレターとか困るんだよね。莉子<sup>りこ</sup>のこと、はつきり、みんなにも言つて

おいたほうがいいと思うんだけど』

『み、みんなには言<sup>い</sup>わないのでっ！』

『なんで？』

『だつて……』

奏多<sup>かなた</sup>の幼なじみというだけでも、たまに、風当たりが強いのに。

実は婚約者<sup>こんやくしゃ</sup>でもあつたなんて知られたら、それこそ周りの目が怖いよ！

とは、さすがに本人に伝えることはできず、ドキドキしながら話の流れを変えてみた。

『奏多<sup>かなた</sup>は……わ、わたしとの結婚<sup>けつこん</sup>のこと、どう思つてるの？』

『どうもなにも。莉子<sup>りこ</sup>以外の女の子のことはよくわからないし、考えたこともないかな』

ああ、そつか。

奏多<sup>かなた</sup>は、自分の意志<sup>いし</sup>で、わたしを選んだわけじゃない。

純粹<sup>じゅすい</sup>だから、疑いもせずに、わたしと結婚<sup>けつこん</sup>するという運命<sup>うんめい</sup>を受けいれただけなんだ。

もしくは、やさしいから拒否<sup>きょひ</sup>できなかつただけの可能性<sup>かのうせい</sup>もある。

あくまでも、彼<sup>かれ</sup>は、運命<sup>うんめい</sup>にわたしを選ばされただけ。

気がついた瞬間<sup>しゅんかん</sup>、ほてつていた体<sup>からだ</sup>がすつと冷えた。

その日<sup>ひ</sup>から、当たり前<sup>まえ</sup>のように奏多<sup>かなた</sup>の隣<sup>となり</sup>にいる自分<sup>じぶん</sup>に、疑問<sup>ぎもん</sup>を抱くようになつた。

『莉子<sup>りこ</sup>。なにかあつた？』

『えつ。あ……なんでも、ないよ』

『ウソ。隠<sup>かく</sup>してゐるでしょ。オレには、言<sup>い</sup>えないような悩みなの？』

あのきらきらした瞳<sup>ひとみ</sup>でまつすぐ見つめられると、胸<sup>むね</sup>の内のドロドロとした黒いものを見<sup>み</sup>

透かされそうで怖かつた。

でもさ、聞けるわけないじやん。

奏多は、凡人のわたしの婚約者でいることに疑問を持つたことはないの？ なんてさ。

なんてさ。

傷つくのが怖くて、彼の本心に触ることはできなかつた。

『……悩みなんて、ないよ。奏多は心配性だなあ』

あの日を境に、わたしたちはなんでも話せる関係ではなくなつたのかもしれない。

そして、本音を聞くことができないまま、中学生になつたんだ。

## ★の4 危ない！

「今日は、五月に行われる体育祭の実行委員を決めます！」

桜峰学園の体育祭は、五月中旬に行われる。

わたしたち一年生にとつては中学校で初めてのイベントだ。体育の授業でも、すでに競技の練習がはじまつている。

楽しみだなあ。わたし、体を動かすのは得意なほうなんだよね！

「男女一人ずつです。立候補者はいませんかあ」  
担任の幸先生が教室中に声をかけるも、誰からも反応はなし。  
みんな、誰かが手を擧げるのを待つて、空気だ。

それなら、やつてみようかな！

「わたし、やります」

「野崎さん、ありがとう！」

女子は野崎さんで決まりね」

幸先生が笑みを浮かべて、黒板にわたしの名前を書く。

他の女の子たちは、ホッとしたよう息をついていた。  
いまは体験入部期間中だけ、部活に入る子からしたら、委員会の仕事はジャマになるもんね。

わたしは中学で部活に入る気がないから、引き受けてもいいかなと思つたんだ。  
「男子の立候補者はいませんかあ！ 今日は決まるまで帰れませんよ！」

「じゃあ、オレやります」

奏多が、まつすぐに手を挙げた瞬間。

教室中に、雷が落ちたようなピリついた空気が走った。

「はいっ！ やつぱり、あたしも実行委員やりたいです！」

「あつ、抜けがけずるーい。私もやりたいのに！」

「せんせい。これだけ立候補者が多いなら、女子の実行委員は公平にじやんけんやあみだくじで決めるべきではないでしようか！」

ひええ。さつきまで誰も見向きもしていなかつたのに、突然、争奪戦へと早変わりだよ。

「女子つて、現金だよなあ……」

「イケメンは、いいよなあ……」

心なしか鼻息が荒くなつていてる女子を横目に、男子たちは遠い目でぼやいている。  
「連」と同じクラスでいる限り、僕らは絶対に日の目を見ないね……」

「むしろ、別クラスになつてもだろうな」

「おおおい！ 彼女の一人もできない中学校生生活なんて俺は認めねえぞ！ 連、一刻も早く彼女を作れ！」

「そうだそだー！ この際、学園一の美少女と付き合うのでもかまわねえぞ！」

意図せず大波乱を巻き起こしてしまつた張本人が、困つたように口を開く。

「彼女はいなけれど、オレには、こん……」

ちよつ！ 奏多、もしかして！

「うわああああああああああああ！」

「野崎さんどうかしましたか!?」

突然大きな声を出したわたしを見て、幸先生が驚く。

「い、いやつ。ちよつとベンケースに虫が止まつてたような気がしたんだけど、見間違いでしたくつ！ 騒いじやつてごめんなさい！」

いま、わたしとの関係をあつさりバラそつとしてたよね？

心臓止まりそうだつたよ！

「あ、そうですか。それにしても、すごい悲鳴でしたね……」

ひと人のいい幸先生は、わたしの苦しいウソを信じてくれたけど、

奏多の一挙一動に注目して

いる他の子たちまではごまかしきれていなかつた。

「王子、さつきなにか言いかけなかつた……？」

「絶対、言いかけてたよ！」

この流れはやばい！

「漣くん！ なんて言おうとしたの!?」

奏多が口を開くよりも先に、高速で先手を打つ。

「あつ。話、さえぎつちゃつてごめんね！ 漣くんっ」

あえての苗字呼び！ 決して深い仲ではありませんよ作戦だ。

冷や汗を流しながら、必死で奏多を見つめると、彼は驚いたように目をパチクリとさせていた。

だけどそれも一瞬のことでの、すぐにわたしから視線をそらした。

「……ううん。なにも言つてないよ、野崎さん」

ホツと胸をなでおろすのと同時に、なんだか、ちくりと胸が痛んだ。

けど、先に他人のフリをはじめたわたしに、こんな感情を抱く資格はないよね。

結局、幸先生が「もめていたようですが、王子は最初に立候補してくれた野崎さん、男子は漣くんで決まりにしますね！ はい、解散解散ー！」としめくくり、やつとホームルームが終わつたのだ。

解散になるなり、由美ちゃんがわたしの机をめがけて突撃してきた。

「莉子！ 莉子は、一体、前世でどんな徳を積んだの!?」

「は……？」

ポカンとするわたしに、由美ちゃんは両手を胸の前で組んで熱弁をふるつた。

「とぼけないでつ！ さつきのホームルームのことだよ！ 莉子が立候補したすぐあとに



連くんが手を擧げるなんて、どういうこと?  
前世はマザー・テレサ!?

なんだよ……!

「いや。たまたまじゃないかな」

連くんと同じ委員会なんて！うわあああ、

うらやましすぎて泣けてくるつ

「そんなにやりたいなら、代わつてもいい  
よ？」

「それはダメだよ！」

「なんで？」

きょとんとしたわたしを、由美ちゃんがピ  
シツと指さす。

「抜け駆けは禁止なの！」

連くんはみんなの

王子さままだもん。これは連奏多親衛隊の入隊テストに出るところだから、しつかり覚えて  
よね！」

「は、はあ……」

連奏多親衛隊、入隊テストまであるんだ。ということは、由美ちゃんはしつかり合格

して、無事に入隊したつことだよね……

由美ちゃんに、わたしが奏多の婚約者なのだと知られたらどんな目にあうかわからない。  
恐ろしい未来を想像して、身震いした。

「と、とこでさつ。由美ちゃんの持つてるうさぎのペンケース、すつごくかわいいよ  
ね。どこで買ったの？」

どうにか話をそらすべく思いついたのは、由美ちゃん愛用のうさぎのペンケースだった。

ゆるつとしたうさぎの顔が、そのままペンケースになつていて。

とつさの思いつきだつたけど、前々からかわいいと思つていたのは本当だ。

「ふつふーん。莉子、いいところに気がついたねえ」

「いいところ？」

「そうつ！ 実はこれね、姫ちゃんとおそろいなの！」

「姫ちゃん……つていうと、現役JCモデル

## の月城姫乃ちゃん？」

「そうそう！ こーゆーのウトそな莉子でも、姫ちゃんのことはさすがに知ってる

かあ

月城姫乃。

みんなに『姫ちゃん』と呼ばれて親しまれている彼女は、人気雑誌『smile』で活躍中の現役JCモデルだ。

笑顔がキュートで、どんなお洋服でも似合っちゃう彼女は、本物のお姫さまみたいにぎらぎらしている。

SNSのフォロワー数もすごいし、いまや女子中学生で彼女を知らない子はないだろう。

う。

「あたし、姫ちゃんの大ファンなんだ！ このベンケースも姫ちゃんが『姫の愛用ベンケース』つてオンラインに投稿したとたんに、飛ぶように売れはじめたんだよ。手にいれるのに、期間限定ショットで一時間も並んじやつたし」

「へええ。そうだつたんだ」

「姫ちゃんはすごいよねえ。あたしたちと同い年なのに、バリバリお仕事してて、ファンもたくさんいてさあ」

「そう、だよね」

姫ちゃんみたいな人には、世界が違つて見えているんだろうな。

生まれながらにして主役になれる、輝かしい人生。

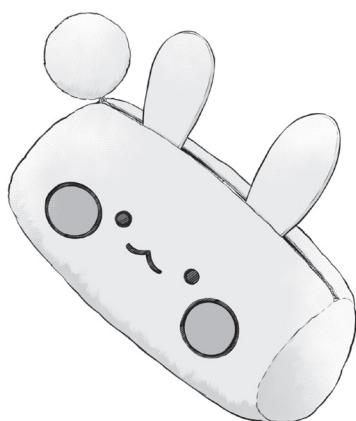
もしも、奏多の幼なじみがわたしじゃなくて、彼女みたいなお姫さまだったから。

みんなに、『運命の一入だね』つて認めてもらえたのかな。

暗い海へ落ちていきそうになつた思考は、近づいてきた足音によつてさえぎられた。

由美ちやーん。そろそろ音楽室に向かわないと、パート練習に間にあわないよー！」

「あれつ、もうそんな時間が！ おしゃべりしすぎちやつた。莉子、また明日ね！」



「う、うん！　またね」  
迎えにきた子と一緒に吹奏楽部の体験入部に向かう由美ちゃんを見送つて、一人で帰宅した。

## ＊＊＊ キュン死にしちやう！

その日の放課後も、前からの約束どおり、奏多は家にやつてきた。

……のだけど、さつきから、す———っと無言。

机の上に広げたスケッチブックに向かつて、黙々と絵を描いている。集中していると黙つているときもあるけど、今日はそうじやない。その証拠に、手がさっぱり動いてないもん。

これは……どこからどう見てもフキゲンな奏多だ。

「そういえばね、奏多が貸してくれたマンガ、読み終わつたよ！」

「…………」

「すぐおもしろくて、あつという間に読んじやつた！　まさか相棒に裏切られるなんてね！　主人公、めちゃくちゃピンチだよ。このあと、どうなつちやうのかなあ」

「…………」

「ねえ、奏多。聞いてる……？」

焦じて奏多の隣に座ると、彼はやつと鉛筆を机に置いてくれた。

それから、うつむいて、小さな声で白状した。

「……無視して、ごめん。すねました」

ですよねー……。明らかに様子がおかしかったもん。

「すねてたって……」

思い当たるフシがあるから心が痛い……。学校でのわたしの態度が原因だよね。

「莉子に、他人みたいな顔で漣くんつて呼ばれたとき、すごく傷ついた」

鋭い針で刺されたみたいに胸が痛む。

自分から言つたことだけど、いざ奏多に苗字で呼ばれたら悲しかつたし、大好きな奏多と他人のフリをするなんて本当は嫌だ。

だけど……仕方ないんだ。

口ごもるわたしに、奏多は言う。

「せつかくまた莉子と同じクラスになれたのに。なんで莉子は学校でオレを避けるの？」

「それは……」

わたしが、奏多と釣りあつていなからだ。

『莉子は、ズルいよ……。なんの努力もしてないのに、漣くんの隣にいられるんだね』

耳の奥によみがえつた、当時の親友の涙声に息苦しくなる。

嫌だ。もう、あんな辛い思いはしたくないよ。

「莉子……？」

震えながらきつく目をつぶつたら、奏多が心配そうに顔をのぞきこんできた。

「大丈夫？ 気分が悪いの？」

「う、ううん。なんでもない」

沙也とのことを、奏多にだけは知られたくない。

これ以上深掘りされないように、無理やり笑みを浮かべた。

そしたら、するりと伸びてきた彼の腕の中に、閉じこめられていた。

「か、奏多……!?」

突然、抱きしめられて、心臓が一気に加速していく。



うるさいぐらい高鳴つた鼓動が、奏多にまで聞こえちゃいそうだ。

「あ、の……」

「顔色が悪いように見えたから。無理してない？」

「し、心配させてごめんね！　もう大丈夫っ！」

ちよつと目まいがしただけだから

「……ほんとに？」

「ほんとにほんと！　だから、そのつ……腕を、放してもらえますか……？」

「……なんで？」

「へ!?　な、なんでつて……？」

このままくつづいてたら、キュンキュンしそぎて死んじやいそうだからだよー！

恥ずかしすぎて答えられないわたしを、奏多がさびしそうな声で追いつめてくる。

「莉子は、オレに抱きしめられるのが嫌？」

「つづく！　聞き方がずるい！」

「だって、莉子が嫌だとと思うことはしたくないもん。けどね……オレは、ずっとこうして  
みたかったよ」

奏多が、回した腕にぎゅつと力をこめる。

どうしよう。ほんとに、死んじやいそなぐらい、ドキドキしてる。

「お願ひ。嫌じやなかつたら、素直になつて」

奏多は、するい。

「奏多にされるのは、い、嫌じやない。……うれしいよ」

「おねがい。から火が出そなほど、恥ずかしい。

勇気を出して、彼の背中におずおずと手を回したら、奏多は甘えるようにわたしの肩に顔をうずめた。

「はー……幸せ。いやされる」

「い、いつまでこうしてゐるの？」

「ずっと」

「ダメに決まつてゐでしょ！」

「学校では、必要以上に話しかけないようにするから。一人きりのときはいいでしょ？」

「えつ……」

「ダメに決まつてゐでしょ！」

「学校では、必要以上に話しかけないようにするから。一人きりのときはいいでしょ？」

「えつ……」

「婚約者だつてバレたら、みんなにからかわれる。莉子はそれが嫌で、学校ではオレと他の人のフリをしたいのかと思つたけど違うの？」

「学校では、必要以上に話しかけないようにするから。一人きりのときはいいでしょ？」

「ううん。……違わないよ」

だけど、わたしはあえて、彼のカン違いを正さなかつた。

うららかな春の日差しがあたたかい、体育の授業中のこと。

グラウンドの隅で整列するわたしたちに、体育のスキンヘッド先生は高らかに告げた。  
「体育祭で行われる選抜リレーのメンバーだが、タイム結果から、結城と野崎に決定した！」

やつたつ！ がんばつて走つたかいがあつたなあ。

「すごいすごい！ あの結城さんに並ぶなんて、莉子、めちゃくちや足速いんだね！」

「ありがとう、由美ちゃん」

びよんびよんと跳ねながら、まるで自分のことのように喜んでくれる由美ちゃんに胸が

# 立ち読みサンプル

## はここまで

あたたかくなる。

「えへへ。わたし、運動は得意なほうなんだ」

「いいなあ。あたしなんて、下から数えたほうが早いぐらいだよ」

いつも元気な由美ちゃんが、そこまで運動が得意じやないのは正直ちょっと意外かも。

「足が速い人つてかつこいいよねえ」

由美ちゃんの視線の先には、グラウンドのもう半分で五十メートル走のタイムを測定し

ている男子たちの姿。

五、六人が連なつて走るなか、一人だけ飛びぬけていた。

「漣くん、断トツの速さ……っ！」

「風のようだね！」

「いや、流れ星だよ！」

どつちもそんなに変わらないのでは……？　とはつっこみづらい。

触らぬ奏多ファンにたまりなし、つてね。

「はああ。授業中のクールかつ理知的な漣くんも素敵だけど、少し息苦しそうに走る姿

も色氣があつて尊いつ、推せる！　ああ、漣くんは、どうしてあんなにうるわしいのもしかして神なの??」

うわああ……由美ちゃんの親衛隊スイッチが入つてしまつた！

「男子の選抜メンバーは、もちろん漣くんで決まりだろうねえ」

「きやーつ！　体育祭、楽しみだなあ。めっちゃ応援しよーつ！」

「騒ぐな、女子ども！　いまは授業中だぞ！」

「そりやあ、騒ぎますよ！　だつて、漣くんが走つてるんですよ!?」

「漣くんの勇姿を見逃して一生後悔したらどうするんですか！　先生は責任を取つてくれ

るんですか!?」

「うつ……まあ、漣がかつこいいのは認めるが……」

サンガラスにスキンヘッドというイカつすぎる見た目をしている先生は、ビックリするほど押しに弱かつた。

あつという間に奏多の話題一色になつてしまい、話に入りそびれていたら、意外な人に話しかけられた。